

特集：徳島の緩和ケア**在宅医療の立場から**

河野 知 弘

河野内科

(平成17年4月26日受付)

(平成17年5月18日受理)

はじめに

人生最期のとき、誰もが自宅で愛する家族に見守られて静かに自分の一生を閉じたい、回復が期待できないのに延命のためだけに体に何本もの点滴チューブがつくのは誰もがごめんだと思っているものと思っていた。ところが最近では違ってきているようである。訪問看護師とかヘルパーが少しでも悪くなると入院をすすめているためであろうか、介護保険が導入された頃から在宅医療を希望する患者が減少してきている。

来院した一般患者、50歳～70歳までの男女50人に自分または家族ががん末期になったとき在宅での治療を希望するかを対談しながらアンケート用紙に記載してもらった。

アンケート

あなたが万一がん末期になったときどこで最期を迎えたいと思いますかの質問にはホスピスを希望するひとが19人ともっとも多く、一般病院は10人、癌専門病院は7人で、自宅と答えた人は13人にすぎなかった。その理由として、介護・看護をしてくれる家族がいないと答えたのは一人だけで、みんな最後まで適切な治療を受けたいからとの答であった。

がん末期には痛み、苦しみ、孤独、死への恐怖など特別なイメージがあるので、がん末期とそれ以外の病気とで入院・在宅医療への要望に違いがあるかの質問には14人は違いがあると答えたが、回答の3分の2の23人はがん末期も同じであるとの答であった。

がん末期の延命治療を望むかの質問には大多数が望まないと答えている。その理由として、ほとんどが家族に負担をかけたくないからとの答で、経済的理由をあげたのは一人だけであった。一方、家族ががん末期になったとき、延命治療を望むかの質問には、望むが8人、望ま

ないが22人、そのときになってみなければわからないが16人であった。すなわち自分の場合は家族に迷惑をかけたくないで延命治療を望まないが、家族の場合はずっと生きてほしいというのが本音のようである。したがって家族ががん末期になったとき、入院治療を希望するのが4分の3を占めている。その理由として病院で最後まで専門的な治療・看護を受けさせたいとの答が半数以上であった。在宅でもモルヒネをつかった疼痛管理、酸素吸入、中心静脈栄養とか胃瘻などの栄養管理、胸水・腹水の除去など入院のベッドサイドで行う医療とほぼ同じ医療が可能であるが、そのことを半数以上が知っているが、知っていてもやはり入院を希望していた。

在宅医療のよさを知っていただくために、患者の了解を得て私が行っている2例について紹介する。

症 例 1

63歳男性。平成14年1月に大学病院で原因不明の間質性肺炎の診断。平成14年5月より在宅酸素療法を受けていたが、呼吸困難が強くなり通院できなくなったため、平成16年11月在宅医療を目的に当院を紹介される。酸素を9L吸入しても経皮酸素飽和度は82%しかなく、ベッド上で座っていても呼吸困難がある。トイレに行ったあとなどは健康なひとが1000mを全力疾走したような息苦しさ、動悸を感じるとのことである。また食事をする間呼吸ができないからほとんど食べられないため、20kg以上の体重減がある。

在宅医療を開始するとき、この疾患は原因不明であり治療法がないこと、末期の状態で明日死亡する可能性もあること、当院は24時間365日の対応ができないこと、その他在宅でできることできないこと、などを患者・家族と十分な話し合いを行った。患者は入院ではプライバシーがないこと、感染の危険性があること、在宅ならずっと家族と一緒に過ごせ、気兼ねのない自由な時間がある

こと、急変時やもっと悪くなったときの治療に不安が残るが、人工呼吸器装着などの延命治療は希望しないので在宅医療を希望するとのことである。胸部レントゲン(写真1)は両側下肺野にスリガラス状陰影があり、横隔膜の上昇、すなわち肺の縮小がみられる。その1年前の胸部CT(写真2)では肺泡領域がつぶれ、細気管支の拡張と蜂巣状を認める。1年以上前のレントゲンであるが、これ以降は呼吸困難が強く受診できなくなったからである。

真綿で首を絞められるような苦しみというが、大変な呼吸困難にもかかわらず、落ち込んだ雰囲気はみられず、奥様や愛犬と明るく残された命を生きている。



写真1 症例1．胸部レントゲン

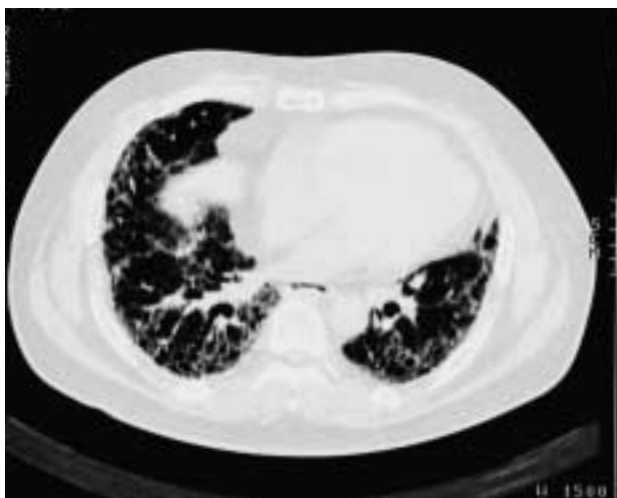


写真2 症例1 胸部CT像

症 例 2

多くのひとは癌と診断されるとすぐに死を宣告されたのも同然、人生おしまいと思っているようである。症例2はそのような例である。76歳男性。平成5年よりC型慢性肝炎、慢性閉塞性肺疾患で治療中、13年に肝癌発症しエタノール注入療法などを受け、症状が安定したため14年12月介護型病院に入院。その入院生活は、個室で話し相手がいないので、気分が落ち込む。食欲がないので経鼻栄養をされる。することがないのでベッドからでることがほとんどなく、自然と寝たきりの生活であったという(病院は管理の面からこのことをよろこぶ?)。ずっと安静臥床で過ごしていたため、廃用症候群となり要介護度5の状態となっていた。そこで家で寝ていても同じということで16年9月家族が無理に退院させ、当院



写真3 症例2．腹部造影CT像

表1．症例2．血液検査

白血球数	54($\times 10^3/\mu\text{l}$)
赤血球数	380($\times 10^4/\mu\text{l}$)
ヘモグロビン量	12.0(g/dl)
ヘマトクリット値	37.9(%)
血小板数	23.0($\times 10^4/\mu\text{l}$)
総蛋白	6.0(g/dl)
アルブミン	3.0(g/dl)
AST(GOT)	45(IU/L)
ALT(GPT)	23(IU/L)
ALP	810(IU/L)
γ -GT(γ GTP)	272(IU/L)
コリンエステラーゼ	4907(IU/L)
血中アンモニア	59($\mu\text{g}/\text{dl}$)
総コレステロール	170(mg/dl)
総ビリルビン	0.3(mg/dl)
α -フェトプロテイン	8.1(ng/ml)
PIVKA	226(MAU/ml)

に在宅医療を依頼。少量であるが自分で食事はとれ、関節の拘縮などで立つのがやっとの状態であった。在宅医療開始時の検査結果を(表1)に示したが、肝機能の余力は十分にあり、安静にしている必要はない。そこで「寝たきりの長生きよりは自分らしさのある生活」の方針で、時間がかかってもトイレには歩いていくこと、食欲がなくても経管栄養はしない、患者にかわってしてあげるのではなく、自分の力をひきだすお手伝いをして下さい、と連絡し訪問看護師、ヘルパーなどの協力を得てリハを開始した。現在ではトイレ・入浴は一人で可能、近所に歩いて散髪に行く、友人とステーキハウスでヘネシーを飲みながら食事をするとところまで改善してきている。

まとめ

アンケートの結果をまとめると、がん末期になれば、ホスピスなどへの入院を希望(その理由は最期まで治療を受けたいから)、そのことの裏返しではあるが、在宅

では十分な治療ができないとの認識があるようである。自分自身の延命治療を望まないのは家族へ負担をかけたくないから、家族ががん末期になったときはずっと生きてほしいと願っているようである。在宅で終末期医療を受けるためには、当然ながら介護してくれる家族が必要である。高齢化・核家族化の進行と家族それぞれが外での仕事を持っていることから、家族が看護・介護に手間・時間をかけることが困難となってきている。訪問看護、ヘルパーを最大限利用してもマンパワー不足が一番のネックとなる。

また、往診医、訪問看護師、ヘルパーなどが共通の認識をもてるようにカンファランスが気楽に行えるように、またかかりつけ医が不在のときに往診する医師など、在宅医療をバックアップする組織作りが望まれる。

終末期に入院か在宅医療か、そのときになってみなければわからないが、どちらを選ぶにしてもプロの目からその相談に乗ってくれるのはかかりつけ医である。普段からかかりつけ医をもつことをおすすめする。

Terminal care -views of a home doctor-

Tomohiro Kawano

Kawano-Naika, Tokushima, Japan

SUMMARY

I made inquiries about terminal care from my patients. Most of them hope to admit to hospice or general hospital for the reason of reducing family's burden. Recently it became difficult that families take care the patient until their end at home. Because there is the defect of manpower however visiting nurses and helpers aid them. On this paper I show the possibility of wellness of terminal care at home through two cases with either idiopathic pneumonia or hepatoma with their consent.

Key words : terminal care at home, home doctor